



現在の島地町から浜田町・西大久保町方面の写真



明治時代中期の島地町から浜田町・西大久保町方面の写真

# 佐世保歴史散策

明治22（1889）年7月1日の「佐世保鎮守府」開庁以降、本市は急速な発展を遂げてきました。そして、今からちょうど120年前の明治35（1902）年4月1日、村から町を飛び越え、一躍市となり、「佐世保市」が誕生しました。今回の特集では、市制施行120周年を記念して、佐世保が村から市となった当時の様子や明治35年の市街図とともに昔と今を写真で振り返ります。皆さんも120年前の佐世保を思い浮かべながら、市内を散策してみませんか。

## 近代都市への発展とともに 村民の期待が高まり「佐世保市」誕生へ

明治22年7月1日の「佐世保鎮守府」開庁以降、当時はまだ村だった佐世保には多くの人が押し寄せ、軍港都市として急速な成長を遂げていきました。鉄道の開通や軍港施設の拡充などによって人口は4万人を超え、市街地には官庁や学校、会社、商店などが建ち並んでいました。

こうした中、村民からは「人口も九州では10番内なのに、村のままではおかしい。この際市にしよう」と期待の声が高まり、明治32年12月、当時の小川寅次村長は市制施行案を村会に提案し、賛成多数で可決されました。

可決後、村長はすぐに県へと申請手続きを行いました。村民の中には反対意見や慎重論もあったことから、申請は却下されました。

その後、反対が強かった横尾・山中・熊ヶ倉の3免（免）は行政区画の一種は「佐世村」（昭和2年に佐世保市に編入）として残ることになり、その他のまちで市への申請手続きを行いました。

そして明治35年3月14日、内務大臣から市制施行と佐世村設立の許可書が発行され、同年4月1日に「佐世保市」が誕生しました。当時の佐世保市の面積は約18km<sup>2</sup>、人口は4万5766人で、全国58市のうち20番目、九州では長崎、福岡、鹿児島、熊本に次ぐ5番目に人口が多い都市となりました。

## 市勢の発展とともに変化した市民生活

明治30年代ごろの佐世保は、軍港整備が進む一方で、交通や通信、教育、衛生などの拡張・整備が進められました。

当時は海陸交通が中心で、海では大阪や長崎などへの汽船が運航しており、明治35年5月には三菱汽船が五島・佐世保間航路を開始しました。陸でも馬車や人力車が市内を走り、明治31年1月には九州鉄道が早岐・佐世保間、早岐・大村間を開通。佐世保駅の開業によって利用客は増加し、明治35年の佐世保駅の年間乗降客数は約20万人でした。また、当時の通信手段であった電信や郵便は「三等電信局」（後の佐世保郵便局）が取り扱っており、市内で公衆電話の取り扱いが開始されたのは明治36年12月のことでした。

一方で、当時市内に小学校はあったものの、まだ中学校はなく、産業発展のために高度な教育が必要とされました。そのため、明治35年4月には今の佐世保北・南高校の前身ともいうべき「佐世保女学校」が山北トミ氏の尽力によって創立され、同校の音楽教材として当時佐世保鎮守府の軍楽長であった田中穂積氏が名曲「美しき天然」をつくりました。

この他にも当時は全国で伝染病（コレラ）が流行し、市内でも多くの患者が確認されました。そのため市は各小学校を休業、九州鉄道でも乗客・車内の消毒や早岐駅での検疫が行われ、衛生思想の徹底や水道敷設の必要性が高まり、伝染病対策は当時最も重要な施策の一つでした。



明治 31 年 1 月に開業した佐世保駅



平成 13 年 12 月に完成した現在の JR 佐世保駅



明治 23 年 6 月に完成した木造の佐世保橋 (アーチ奥側)



昭和 59 年 9 月に完成した現在の佐世保橋



明治 38 年に谷郷町から移転した佐世保郵便局



昭和 59 年 9 月に開局した佐世保浜田郵便局



明治 22 年に完成した佐世保鎮守府庁表門



現在の海上自衛隊佐世保地方総監部正門



明治三十五年新版 佐世保市街全図  
(国立国会図書館デジタルコレクションより)



佐世保玉屋から撮影した現在の市街地

特集に関する問い合わせ 文化財課 ☎ 24-1111